３　有識者意見

上岡　学（武蔵野大学副学長）

（１）子どもの権利推進

≪ 評 価 ≫

アンケート調査、ワークショップ、生成ＡＩによる分析を組み合わせ、子どもの意見を政策形成へ反映しようとする取組は、子どもの権利推進の観点から先進的な実践であり、高く評価できる。特に、高校生の約４分の１に子ども部屋がないという結果は、千代田区の住宅事情を反映した特徴的なデータであり、中高生の居場所づくりの必要性を裏付ける重要な知見となっている。

また、子どもの意見を「聞く」ことにとどまらず、その結果を具体的な施策へ結び付けようとしている点も評価できる。さらに、子どもが自ら意見を表明し、その意見が行政に反映される経験そのものが、自己肯定感や主権者意識、社会参画意識を育む教育的意義を持つことも重要である。生成ＡＩによる分析は有効な手法であるが、自由記述に込められた背景や思いについては、人による丁寧な読み取りを併せて行うことで、より質の高い施策形成につながるものと考える。

≪今後の取組み≫

子ども部屋がない背景については、住宅事情だけでなく、家庭の教育方針や生活実態なども含めた質的な分析を進めることが望まれる。その結果を踏まえ、中高生が安心して学び、交流し、相談できるサードプレイスの整備を進めるに当たっては、先進事例も参考にしながら、学習・交流・相談・休息など複数の機能を備えた施設づくりを期待したい。

また、保護者から求められている大人の見守り機能や地域との交流機能も取り入れ、安全で継続的に利用できる運営体制を構築することが重要である。さらに、子どもの権利教育については、リーフレットの配布だけではなく、ヤングケアラーや虐待、ネグレクト等の課題とも関連付けながら、子ども自身が自分の生活や権利として理解できる授業や特別活動の充実を図ることが望まれる。

（２）ちよだリテラシー教育

≪ 評 価 ≫

千代田区がリテラシー教育を区全体の重点施策として位置付け、教育課程へ体系的に位置付けながら推進していることは高く評価できる。情報モラルやＳＮＳ上での適切な発信については一定の成果が認められ、生成ＡＩ、新聞教材、読解力向上ワークシート等を組み合わせた取組も先進的である。

一方で、アンケート結果からは、情報の真偽を見極める力、事実と意見を区別する力、複数の情報を比較・吟味して自分の考えを形成・修正する力には課題が見られ、特に中学校段階で数値が低下する傾向が確認された。リテラシーは知識だけでは身に付かず、継続的な学習と実践を通して育成されるものである。教科横断的な取組は評価できるが、それに加えて情報そのものを教材とした直接的な学習機会を確保し、児童生徒が具体的な事例を通して考え、判断する経験を積み重ねることが重要である。

いずれにしても様々な状況を考慮したうえでのリテラシー教育をされていることがわかる。今後はさらに実践事例をもとにした内容やより体系立てた内容の精査を進めることを期待したい。

≪今後の取組み≫

実際のインターネット記事やＳＮＳ、生成ＡＩの回答を教材として比較・検証し、発信者、根拠、引用元、信頼性などを多面的に判断する授業を一層充実させていただきたい。総合的な学習の時間に加え、国語、社会、理科など各教科でも継続的に扱うことで、知識と実践を往還する学習が期待できる。

また、地域調査やインタビュー、図書館・博物館での調査など実体験を伴う学習を組み合わせることで、ＡＩでは代替できない主体的な思考力・判断力・表現力を育成できる。

これらの学びはＡＩを利用するための基礎的な学習方法であり、これらをＡＩとの学びとのバランスで考える必要がある。

さらに、リテラシー教育を個別の教育課題として追加するのではなく、探究学習や情報活用能力を支える基盤的資質・能力として教育課程全体の中で体系的・継続的に育成していくことを期待する。特に探究学習においては様々な可能性が考えられ、今後さらに充実したカリキュラムを計画する必要がある。

（３）九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育

≪ 評 価 ≫

九段中等教育学校におけるＩＣＴ環境整備と生成ＡＩ活用は全国的にも先進的であり、教育・校務双方で計画的かつ効果的に活用されていることを高く評価する。授業では、生徒が主体的に端末を活用しながら、自ら調べ、考え、協働的に学ぶ姿が見られ、教員もＡＩを単なる効率化ではなく思考を深める学習ツールとして位置付けていた。

見学において通常の授業でもタブレットを使いこなしており、道具として十分活用している場面を見ることができた。生徒同士の対話もあり、ＩＣＴ活用をバランスよく行っていることがよくわかった。一方、情報の選択授業では少数の生徒がプログラミングを行っており、より高度な内容を習得できる環境が整っている。より多くの生徒がプログラミングまで興味がもてるとより高度になるのではないかと思った。

また、生徒自身がＡＩの誤情報や依存の危険性を理解し、ファクトチェックや自分で考えることの重要性を認識している点も大きな成果である。ＩＣＴを積極的に活用しながらも、基礎・基本を大切にした授業づくりを継続していることは、今後の学校教育のモデルとなる実践である。

≪今後の取組み≫

ＩＣＴや生成ＡＩの活用をさらに推進するとともに、教科の原理・原則や基礎・基本を全員で学ぶ授業を引き続き重視していただきたい。まず教科書や資料、実物観察や実験・制作など直接体験を通して基礎を理解し、その上でＡＩを活用して思考を広げる学習過程を大切にすることが望まれる。

プログラミングをどの授業でどこまで教えるのかは今後の教育において考えるべきポイントではないかと感じた。活用することはかなりのレベルまで到達していると思うので次なる課題かもしれない。

大学教育では、ＡＩだけで作成したレポートは学習内容が定着しにくいという知見も示されており、学校段階では自ら調べ、まとめ、説明する経験を十分保障することが重要である。ＡＩを利用した成果についても、自分の言葉で説明・議論できることを重視した評価を工夫し、概念理解や探究的な学びにつながるＩＣＴ活用へ一層発展させることを期待する。

ＩＣＴやＡＩの活用は今後も発達段階や教育課程のそれぞれの段階でどのように進めていくのか全体の流れを考え構想していくことが必要である。

清水　哲也（元多摩市教育長）

（1）子どもの権利推進

≪ 評 価 ≫

千代田区では、すべての子どもが自分らしく安心して過ごせる環境づくりを目指し、区のホームページを通じて「子どもの権利」の周知を図っている。イラストを多用して視覚的にわかりやすく解説した「子どもの権利に関するリーフレット」を、小学生向けと中学生以上向けに分けて作成・配布している。このことは、家庭や地域で子どもの権利について話し合い、考えるきっかけを提供してきたと言える。

こうした流れをベースに、千代田区教育委員会では子どもの意見聴取や施策反映に係る取り組みとして、「子どもの居場所」をテーマに区内でアンケート調査を実施し、ＡＩ分析により子どもたちの潜在的ニーズ等を可視化することでエビデンスに基づいた適切な施策展開を目指している。千代田区教育委員会がＡＩ分析等を活用し、子どもの「居場所ニーズ」をいち早く施策に反映させようとした取り組みは先進的で素晴らしい第一歩である。

こうした意見聴取やＡＩ分析に基づき、子どもが安心感を得られるプラットホームとしての「多様な選択肢を持つ居場所」の開設が進むことは、放課後を一人で過ごす子どもの孤立感を防ぐセーフティネットとなり得る。子どもの権利を推進する千代田区教育委員会にとって、子どもの意見を聞き、子どもが必要とする「子どもに関する施策」の具現化を図ることは、「子どもをまんなかに置いた教育行政」の取り組みとして大いに評価したい。

≪今後の取組み≫

子どもから区への意見発信については、学校で日常的に使うタブレットに匿名で気軽にスタンプや一言を投函できる「仮称・子どもの声ポスト」アプリを導入してはどうか。本区ではＡＩでの集計や自動分析が可能であり、様々な展開・応用が期待できる。また、意見を出しやすくする工夫としては、テキストだけでなく、イラストや「不満足・満足」の感情メーター、選択クイズなど、非言語でも表現できる多面的な窓口を設けることで、多様な子どもたちへの配慮ともなろう。もう一つ大切なのは、「自己効力感」を実感させることである。「みんなの意見でこう変わった！」をアニメ等で子どもたちにフィードバックする必要がある。

今後、子どもの意見を聴取することで、区として考慮するべきことは、早期の『ガイドライン』の検討・整備である。例えば、子ども目線で考えると以下のような点への配慮が必要ではないか。

①集まった意見に対し、区（千代田区教育委員会）がどのように検討し、なぜ実現できないのか・見送りにしたのかの「フィードバックの期限と方法」を明確にする。

②不登校や外国籍など、声をあげにくい子どもの意見をすくいあげる方策を明文化する。

③子どもの個人情報保護と意見表明による不利益が生じさせないためのセーフティガードを確立する。

④子どもを対等なパートナーとして尊重するマニュアルを作成する。

こうした点を整備することで『ガイドライン』を機能させていってほしい。

（２）ちよだリテラシー教育

≪ 評 価 ≫

千代田区教育委員会は、全国に先駆けて「ちよだリテラシー教育」を教育課程に位置付け、体系的な情報リテラシー教育を推進している。特にメディアリテラシーの育成に力を入れており、情報を「そのままうのみにせず」に一度立ち止まって考える「批判的思考・クリティカルシンキング」の育成に力を入れている。また、千代田区子育て・教育ビジョンにある『情報を読み解き自己の信念に従って行動ができる人』の育成を目指し、国語科での言語能力の習得や読書活動、情報モラル教育、ＡＩ体験などを各学校で展開するとともに、実際のフェイクニュース事例を用いたメディアリテラシー授業など、実践的かつ属人化させない千代田区教育委員会主導のカリキュラムが構築されている。

注目すべきは、児童・生徒を対象に令和７年５月に実施したリテラシー能力の「実態調査アンケート」である。調査項目の「ネット上で発信するときは相手を傷つけない」「自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないようにする」「同じ立場でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる」で、比較的高い数値を示している。インターネット上での他者への配慮や、自身の行動が社会に与える影響の理解についてある程度の達成度が示され、自己防衛やマナーに関する意識が定着していると言える。ただ、一方で同調査から、子どもたちは「情報の出所や時期を確認する重要性」を認識しているものの、「確かな情報を見極める力」や「事実と意見を区別する力」、「批判的に読み解く力」が依然として課題であり、千代田区教育委員会として実態調査の分析を丁寧に行い次のステップに進もうとしている。

≪今後の取組み≫

千代田区教育委員会は令和７年の実態調査の分析から、令和８年は以下の方向性で取り組みをさらに加速・深化させている。

① 区独自のメディアリテラシー検定及び教材開発
② 小学校高学年から授業で生成ＡＩを活用
③ 読解力向上ワークシートの導入
④ 子ども新聞、中高生新聞の配架

こうした取り組みにより、「ちよだリテラシー教育」が推進され、メディアリテラシーの育成が図られることを期待したい。今後、千代田区教育委員会としては、個々の教員の裁量に依存しない体系的な仕組みを高度化させ、子どもたちが高度情報化社会を主体的かつ安全に生き抜くための「生存戦略」として、全国に先駆けた情報リテラシー教育のロールモデルを確立していってほしい。

（３）九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育

≪ 評 価 ≫

千代田区立九段中等教育学校は、文部科学省から「リーディングＤＸスクール」および「生成ＡＩパイロット校」に指定されており、先進的かつ安全なＩＣＴ教育環境を構築している。１人１台の端末環境に加え、全校生徒（中学１年から高校３年）が日常的に使える校内専用の安全な生成ＡＩツール「otomotto（オトモット）」を独自開発・導入している点が最大の強みである。

ＡＩ初心者である私が、本校の生成ＡＩ「otomotto」活用の有効性を確認したのは、校内での効果的なプロンプト（ＡＩへの指示文）を共有・蓄積していることである。本校専用の生成ＡＩツール「otomotto」を利用することで、一部の得意な人だけでなく、学校全体の教員や生徒が「ＡＩの賢い使い方」を自然と身につけ、教育の質や業務の効率を底上げできる仕組みを作り上げようとしている。

本校では令和６年に独自生成ＡＩ 「otomotto」を開発・導入し、令和７年度に運用後の教員向け及び生徒向けのアンケートを実施し、活用効果や生徒の声をまとめている。

教員向けアンケートから、教員にとって生成ＡＩ導入のメリットは、単に「作業が楽になった」という省力化に留まらず、「事務処理やデータ分析の時間を削ることで、教員が生徒と向き合う時間を生み出した（業務の高度化）」が挙げられており、教員の働き方改革の一助ともなりうるツールであることがわかる。

一方、生徒向けアンケート結果から、生徒は生成ＡＩを「思考を代替するツールではなく」、「思考を支援・拡張するツール」として位置づけ始めていると分析

されており、単に「便利になった」というだけでなく、生徒の「主体的・対話的で深い学びを補完するツール」として機能し始めていることがわかる。

こうした本校の先進的なＡＩ導入は、校長の強力なリーダーシップと教員の弛まぬ努力の賜物である。校長は文部科学省のパイロット校指定を機に、安全な校内独自のＡＩ環境の構築を迅速に行ってきた。これに応えて、教員は研修を重ねプロンプトの工夫や授業での「壁打ち」手法を開拓してきた。ＡＩのメリットだけでなくコピペ等の課題を見据えた「ＡＩリテラシー教育」を検討するなど学校組織一丸となった実践が行われてきたことが分かる。

≪今後の取組み≫

今後は、目的や状況に応じて生成ＡＩ「otomotto」とのやり取り（対話の微調整）をさらに高度化させ、生徒一人ひとりの「個別最適な学び」の質を一層高めていくとのことを期待したい。また、同校で蓄積された「安全な校内ＡＩ運用」や「プロンプト共有の仕組み」といった実践知は、千代田区教育委員会が区内の小・中学校へ順次導入を進める次世代教育生成ＡＩの基盤となるであろう。本校の実践が地域や全国の教育ＤＸを牽引するロールモデルとして発展することを期待したい。

桑原　淳子（日本女子大学特任教授）

（1）子どもの権利推進

≪ 評 価 ≫

千代田区が子どもの意見を施策に反映する取組みを進められたことは、子どもの権利を尊重する社会の実現に向け大変意義深く高く評価したい。また調査結果から実態を把握し、子どものサードプレイスを地域団体と連携して検討していくという方向性も、子どもの意見の実現や社会全体で子どもを育てる機運の醸成の面から価値のあることと考える。

また、今回のアンケート調査において、デジタルネイティブ世代であっても双方向の直接的なコミュニケーションを求める子どもたちが一定数いるという結果は、今後の取組みへの示唆となると思われる。実際、ワークショップは、他者と話すことで「考えがまとまって発信できた」「意見を言語化できた」などの声が寄せられるなど、子どもの意見表明を支える取組となっていることが分かる。子どもたちが心理的安全性の下で他者と語り合い、自分事として意見を形成し表明していく経験は、子ども自身が社会の一員として考え、参画していく力を育む貴重な学びにもつながる。さらに、子どもの意見を聴くための職員の研修の実施やガイドラインの作成などが進められていることも、今後さらに取組みを深めていくための具体的な方策として重要なことである。

≪今後の取組み≫

今後は、自分からは意見を上げにくい子どもたちの思いも丁寧に寄り添う視点も大切にしたい。また生成ＡＩによる分析は全体像を把握する上で有効であるが、自由記述に込められた子どもの思いや背景を、大人が読んで実感として理解するシステムも大切にしたい。

子どもが安心して自分の思いを表現できる環境づくりとして、年齢の近い大学生サポーターの活用や学校など日常生活の場で対話を重ねることも、多様な子どもの考えを理解する上で有効であると考える。また幼児教育の先進的な取組みをしているイタリアのレッジョ・エミリア市では、幼児であっても市民として意見表明をする取組も行われており、幼児期から発達段階に応じた方法で表現する機会を積み重ねていくことも必要ではないか。

子どもたちから「どのような意見があり、どのように施策へ反映されたのか」を丁寧に伝え続けるとともに、自分たちの声により地域や社会を変えていけるという経験を通し、子ども自身の育ちを支える教育的な営みでもあるという視点を今後も大切にしていただきたい。

（2）ちよだリテラシー教育

≪ 評 価 ≫

児童期から青年期にかけては、直接体験や人との関わりを通して、自ら考え、迷い、試行錯誤を重ねながら自己を形成していく重要な時期である。だからこそ、ＳＮＳや生成ＡＩが急速に普及する中、「情報を読み解き、自己の信念に従って行動できる人」の育成を目指すちよだリテラシー教育は、これからの時代に不可欠な意義のある取組みであると考える。「育成する力」を整理し、各学校の教育課程に位置付けて推進していること、さらに実態調査により児童・生徒の現状把握を行っていることを高く評価したい。

調査結果では、情報モラルや他者への配慮などへの理解は高い水準で身に付いている一方で、情報の信頼性を見極める力や、事実と意見を区別する力、批判的に読み解く力、自分の考えを形成・発信する力などには課題があることが示されている。特に中学生になると自己評価が低下する傾向がみられるが、これは情報社会の課題や判断の難しさを深く自覚し始めた結果とも考えられる。

こうした課題を把握した上で、令和８年度からリテラシー検定や読解力向上ワークシート、生成ＡＩの適切な活用など具体的な改善策を講じようとしている点も、先進的な取組みである。今後も子どもの実態を捉えながら、柔軟な実践に取り組んでいかれることを期待する。

≪今後の取組み≫

ＩＣＴや生成ＡＩが主体的に学習する効果を高め、自己形成を支援するツールとなっていくために、今後の取組みとして示されている５つの柱を着実に推進することが重要である。その際、子どもたちが自ら問いをもち、考え、友達と意見を交換しながら協働的に学ぶ経験を引き続き積み重ねていってほしい。地域での調査活動やインタビュー、体験的な学習など、実社会との関わりを通して情報を収集・検証する探究的学習と関連付けながら、課題を自分事として捉え、自分の考えを形成し深める過程を一層充実させていくことを期待したい。

（３）九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育

≪ 評 価 ≫

九段中等教育学校は、文部科学省の生成ＡＩパイロット校及びＤＸハイスクール指定校として、学校独自の生成ＡＩシステム「otomotto」を開発・活用するとともに、探究学習と結び付けながら先進的な教育実践を進められている。ＡＩ時代に必要な資質・能力の育成に取り組み、区全体のＩＣＴ教育を牽引する役割を果たしており、授業風景にも生徒同士や生徒と教師の自由な対話が感じられ、主体的・協働的に学ぶ雰囲気が感じられたことは印象的であった。

また、生徒へのアンケート調査では、生成ＡＩの利便性を感じる一方で、「情報の真偽や信頼性の判断の難しさ」や「生成ＡＩへの依存による思考力の低下への不安」などが具体的な言葉で示されており、それを生徒自身が自覚しているところに大きな意味があると感じている。だからこそ生成ＡＩの活用の工夫について「まずは自分で考える」「ファクトチェックを行う」「ＡＩの回答を自分の言葉で表現し直す」といった回答があげられ、生成ＡＩの情報を鵜呑みにするのではなく、主体的に考えて活用しようとする姿勢が育まれていることがうかがえ、リテラシー教育の成果が表れていると評価したい。

≪今後の取組み≫

中学生から高校生へと発達が進む中で、「事実と意見を区別する力」「確かな情報を見極める力」など、生成ＡＩの特性を理解し適切に活用する力を段階的に育成していくことが必要である。自己の考えをさらに深め広げていくことを繰り返しながら「自己の信念に従って行動できる」力や態度を育成していくことが大切である。生成ＡＩが、情報提供や要約、添削、助言なども行うことができる時代だからこそ、教師には、生成ＡＩでの学習を支援するとともに、多様な考え方との出会いや他者との対話を通して、子どもが自分なりの価値観や生き方を形成していく過程に寄り添う存在として、その専門性と指導力を一層発揮していかれることを期待する。

九段中等教育学校で蓄積された生成ＡＩやＩＣＴ活用の実践成果を検証し続け、区立小・中学校に共有することで、千代田区全体のリテラシー教育の向上に寄与していただきたい。

高橋　純（東京学芸大学教授）

（1）子どもの権利推進

≪ 評 価 ≫

子ども 671 件・保護者 1,020 件のアンケートにワークショップを組み合わせ、さらに自由記述を生成ＡＩ（Talk to the City）で分析するという、定量・定性の両面から子どもの声を多面的に汲み取る試みを高く評価する。特に、大量の意見を政策検討に接続するための生成ＡＩの試行活用は先進的であり、「こどもまんなか」の趣旨に沿うものである。

自宅以外に落ち着ける場所を持たない子どもや、年齢が上がるほど子ども部屋を持てない子どもが増えるという、都市部特有の課題が具体的に可視化された点も意義深い。

≪今後の取組み≫

１）居場所づくりについては、子ども部屋を持てない家庭が多い都市部の実態を踏まえ、駅近など利便性の高い場所に、一人でも安心して過ごし学習できる中高生の居場所を整えることが有効である。地方の駅前再生（旧商業施設の図書館・交流拠点化）には参考になるノウハウが多い一方、トラブル防止の観点から大人の見守りは不可欠である。

２）意見聴取にとどまらず、高校生自身を委員等として区政に参画させる仕組みを検討したい。東京都の子供・子育て会議で子供・若者委員の公募に多くの応募があり、熱意ある参加を引き出せることが示されている。

３）生成ＡＩの活用を一段進めることを期待する。完成された分析資料を外部に委託して受け取る「静的・代替的」な使い方にとどめず、生データを保持して随時問い合わせ、他自治体のデータと比較・仕分けするなど、インタラクティブで「拡張的」な分析へと視野を広げる余地がある。

（2）ちよだリテラシー教育

≪ 評 価 ≫

こうした取組を行う自治体はまだ少なく、現代的な課題に正面から取り組み、成果も表れている点を高く評価したい。特に、メディアリテラシーを入り口として令和７年度から体系的に着手し、実態調査によって課題を数値で可視化できている点は意義深い。

調査からは、情報モラルや相手への配慮は高い水準で定着している一方、「事実と意見の区別」「批判的な読み解き」「情報の信頼性を見極める力」といった高次のリテラシーはさらなる努力が必要と思われる。

≪今後の取組み≫

これら高次の力は、メディアリテラシーとして教えれば正答率が上がるという性質のものではなく、総合的な経験・知識と、問題解決・探究活動の繰り返しを通じて育つものと考える。個々の〇〇教育としてではなく、それらを支える「探究基礎・問題解決基礎」なども含むリテラシーとして全体を貫く設計が求められるのではないか。

「見方・考え方」もキーになる一つだと思われる。教科固有の見方・考え方にとどまらず、世の中を読み解く見方・考え方をリテラシーとして育てる視点をもてれば、例えば、初めて出会う情報でも真偽やパターンを判断できるようになる。

（３）九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育

≪ 評 価 ≫

１人１台端末、独自の生成ＡＩ「otomotto」、文部科学省の生成ＡＩパイロット校・高等学校ＤＸ加速化推進事業の指定など、全国的にも稀な水準でＩＣＴ環境と実践が整備されている。国語等の指導案や視察等を通して教員の熱意と力量の高さがうかがえ、高く評価したい。ＩＣＴの安全で批判的な活用の土台づくりが進められている点も評価できる。

≪今後の取組み≫

「生徒にどのような力をつけるべきか」から発想する議論を重ね、単に今のある授業の改善に留まらない本質的な改善があることを期待したい。それらを実現する人材と環境は本校に備わっていると考える。

入試に代表される「見える学力」は、ＡＩが代替しうる領域でもある。その先の「概念的理解」は体験や議論等を通じて一人一人の中に構成される、ＡＩに奪われない理解のレベルを目標に据えたい。

（４）定量的指標を用いた項目に係る評価及び意見

ア　全国学力・学習状況調査の正答率

≪上岡　学≫

全国及び東京都平均を継続して上回る結果を維持していることは、学校現場における授業改善や教育委員会の支援の成果として高く評価できる。特に小学校では学力が安定しており、基礎的・基本的な学力の定着が着実に図られていることがうかがえる。

一方、中学校では年度による変動も見られることから、学習内容の高度化に伴い、基礎学力の定着が十分でない児童・生徒への支援を継続して充実させる必要がある。また、全国平均との差だけでなく、学力分布や下位層の状況にも着目し、一人一人の学習状況を把握している点は評価できる。学力向上を数値のみで捉えるのではなく、子どもの学びの質や主体性の育成と合わせて評価していく視点も重要である。

≪清水　哲也≫

千代田区における令和７年度の全国学力・学習状況調査（対象：小学６年生・中学３年生）では、小中学校ともに国語・算数・数学・理科の各教科で全国および東京都の平均正答率を上回る高い学力を維持している点が最大の成果である。千代田区が推進してきた「千代田区立学校指導改善プラン」による各校の授業改善が一定の成果を上げており、基礎的な知識・技能はもちろん、思考力や表現力を問う問題でも高い正答率を維持している。

千代田区では小中連携により、小学校から中学校へスムーズに学力と学習意欲が接続されており、全体的な教育水準の高さが証明されている。こうした結果の裏には各学校の行う「千代田区立学校指導改善プラン」を用いた学力分析の充実がある。また、全国学力テストだけでなく、区独自の達成度調査（意識調査含む）の経年分析を活用し、個々の児童生徒に寄り添った指導方法と支援策の改善も進められている。今後、意識調査と学力とのクロス集計等の結果を踏まえて、生活リズムや学習習慣などの課題が改善されることで、学力調査等での「正答数の少ない（学力）層」のボトムアップが図られることを期待したい。

≪桑原　淳子≫

全国学力・学習状況調査において、千代田区は全国及び東京都平均を上回る結果を維持しており、地域性とともに、これまで各学校が取り組んできた指導改善の積み重ねの成果でもあるだろう。一方で、探究的な学びや個別最適な学び、協働的な学びが重視される今日においては、子ども一人ひとりの学びの過程や興味・関心、育ちを丁寧に見取り、それぞれに応じた支援を行う教師の児童・生徒理解や授業づくりが、今後ますます重要になる。

「一定数存在する下位層への丁寧な支援を行う」という課題も示されており、学習状況調査との関連などから指導の方向性の一端が見えてくることも予想されるが、児童・生徒の困り感への共感的理解と個々への必要な支援、また、協働的な学びの基盤となる学級づくりなど教師の指導力が求められる。子ども一人ひとりのニーズに目を向けながら、誰一人取り残さない教育を進めていただきたい。

≪高橋　純≫

本区の正答率は全国・東京都を安定して上回る高水準にあり、指導改善プラン等の着実な取組の成果である。基礎・基本を支える教員の献身的な指導、とりわけ学習に困難を抱える層を支える努力を高く評価したい。

一方で、すでに高水準にあるため、平均正答率の維持・向上をＰＤＣＡの主目標に据えても伸びしろは限定的である。「下位層の割合を減らす」ことを数値目標として設定するなど、目標の置き方を見直す段階にあると考える。

中長期的には、本年ＯＥＣＤが示した知見（教員の指導に関する知識量と生徒の学力に強い相関がみられること）を踏まえ、学力調査の点数を直接追うだけではなく、教員の指導力・知識の底上げを通じて包括的に子どもの力を高める視点を重視することも考えられる。

加えてＡＩ時代への留意として、明確に言語化・構造化された「見える学力」は生成ＡＩが最も得意とする領域である。本区は国の方針に沿ってスコアを確保しつつ、ＡＩに代替されにくい概念的・本質的理解や人格の形成（ラーニングコンパス、エージェンシー等に通じるもの）を併せて育む「二刀流」を志向したい。学びに向かう力や人間性といった、ＡＩ時代にこそ重要な力を簡素化・縮小することがないよう留意が必要と思われる。

イ　千代田区立学校の体力・運動能力調査における体力合計点平均値

≪上岡　学≫

調査結果を学校全体だけでなく、学級や個人レベルまで丁寧に分析し、個別最適な学びにつなげる取組を一層充実させることが望まれる。千代田区独自の取り組みであるコオーディネーショントレーニングが体力向上に寄与している、小学校段階での体力・運動能力は比較的維持されていると考えられる。中学校段階において体力・運動能力に関する低下傾向がみられるので小学校段階から継続した体力づくりを検討することが望まれる。

また、主体的・対話的で深い学びや探究的な学習との両立を図りながら、基礎学力の底上げと上位層のさらなる伸長を目指すことが期待される。ＩＣＴやＡＩなど新たな教育手法も活用しつつ、授業改善の成果を継続的に検証し、エビデンスに基づく教育実践を積み重ねることで、千代田区の教育の質をさらに高めていくことを期待したい。

≪清水　哲也≫

長座体前屈にみられる柔軟性や反復横跳びなどの敏捷性において、全国や東京都の平均をおおむね上回る傾向にある。園や学校での積極的な声掛け、多様な運動プログラムの導入により、子どもたちが体を動かす楽しさを実感し、特定の種目で高いパフォーマンスを発揮している。こうした背景にあるのは、区内の園・学校で継続的に導入しているコオーディネーショントレーニングの実施である。目や耳からの情報を脳で処理し、体を巧みに動かす能力を鍛え、運動の基礎となる神経系を刺激する運動である。本区では長年、体育教育の場でこの取り組みを地道に積み重ねてきた。特定の種目で高いパフォーマンスが発揮でき今回の調査結果となったのであろう。

中学校では、握力やボール投げに代表される「筋力・投力」に加え、シャトルランなどの「持久力」の低下が課題となっている。都心特有の空き地や外遊びの場（空間）の不足、スマートフォンの利用によるスクリーンタイムの増加といった生活習慣の課題もあり、日常的な運動時間の確保と全身をバランスよく使う運動機会の創出が求められる。

≪桑原　淳子≫

コオーディネーショントレーニングについては４年間の継続実施により学校現場への定着が図られている。楽しく運動しながら自分の身体の動きを感じ取り、違いに気付きながら自分なりに調整していく身体感覚を育むことを重視しており、ＪＡＣＯＴのホームページには中学生がはつらつと取り組み、自己の変化に驚く様子も見られる。グラフでは、全国体力・運動能力調査の数値については顕著な向上は表れていないが、学校やクラス数によって実施回数が異なることなども影響していることは考えられる。千代田区においては、幼児期からコオーディネーショントレーニングに取り組んでおり、５歳児の測定では、全国や都の平均を大きく上回る結果も見られている。しかしながら、運動能力調査の数値の向上のみではなく、自身の身体への気付きや運動への意欲、他者との協働性、自己肯定感といった非認知能力の育ちも育む取組みでもあり、子ども自身が運動する楽しさや心地よさを感じ、生涯にわたって身体を動かす習慣につながる取組として発展させていただきたい。

≪高橋　純≫

全校（園）で継続してきたコオーディネーショントレーニングの取組を高く評価する。小学校５年生の良好な結果、とりわけ反復横とび（敏捷性）の高さにその成果が表れており、この取組がなければより厳しい結果になっていた可能性がある。考え方を一層広げていくことが望まれる。

一方、中学校２年生では全国平均を下回る傾向が続き、20m シャトルランや持久走など全身持久力に課題がある。部活動の実施方法が変わり、活動回数にも制限が設けられるなか、運動機会の確保という観点からの目配りも必要である。

そのうえで、体力合計点の向上自体のみを目的化せず、「生涯スポーツ」「健康で文化的な生活の基盤」という大きな視点から捉え直したい。区の施設を子どものうちから使って体を動かす楽しさを身につけ、生涯にわたり運動を楽しめる素地をつくることは、教育にとどまらず福祉的な意義も大きい。仲間と楽しむ子も一人で取り組みたい子もいるという多様性を尊重し、画一的な体力向上にとどまらない方向を期待する。

４　各事業についての評価及び今後の取組み

（１）子どもの権利推進

本区の子どもの権利推進については、「子どもの権利に関するリーフレット」の作成・配布等を通じて、子どもや保護者、地域に対する権利の周知・啓発を図るとともに、令和７年度には、子どもから区へ意見を伝える方法や居場所をテーマとしたアンケート調査やワークショップを実施し、生成ＡＩを活用した分析により、子どもたちの意見やニーズの把握に努めたことについて高い評価をいただいた。特に、子どもの意見を聴くだけでなく、居場所づくりなどの施策検討につなげている点や、子どもが意見を表明し、それが施策に反映される経験が、自己肯定感や社会参画意識の醸成につながる点について評価をいただいた。また、職員研修やガイドライン作成の検討など、意見反映に向けた仕組みづくりを進めていることについても肯定的な意見をいただいた。

一方で、有識者からは、自ら意見を表明しにくい子どもや、不登校、外国籍など声を上げにくい立場にある子どもの意見を把握する必要があることや、寄せられた意見をどのように検討し施策へ反映したのかを分かりやすく伝える仕組みが重要であるとの指摘をいただいた。また、生成ＡＩによる分析は有効な手法である一方、自由記述に込められた背景については、人による丁寧な読み取りを併せて行う必要があるとの意見もいただいた。

今後は、子どもの意見の政策反映に係るガイドラインの整備、運用を進めるとともに、引き続き職員の理解促進を図りながら、アンケートやワークショップ等を通じて多様な子どもの声を把握する仕組みづくりを進める。また、施策への反映状況を発信し、子ども自身が意見表明の意義を実感できる環境づくりに取り組む。さらに、中高生の居場所づくりにおいては、把握した意見やニーズを踏まえ、安心して過ごし、学び、交流できる環境の充実を図り、子どもの権利が尊重されるまちづくりを推進していく。

（２）ちよだリテラシー教育

ちよだリテラシー教育については、情報モラルや他者への配慮といった基礎的な力の定着が評価される一方で、情報の信頼性を見極める力、事実と意見を区別する力、複数の情報を比較・吟味して自分の考えを形成する力などより高度なリテラシーの育成が今後の重要な課題として示された。

こうした課題を踏まえ、実際のインターネット記事やＳＮＳ、生成ＡＩが生成した情報等を教材として活用し、発信者や根拠、引用元、信頼性を多面的に検証する学習を一層充実させるとともに、各教科や探究的な学習を通して、情報を収集・分析し、自らの考えを形成・発信する力の育成を図っていく。特に、言語能力と情報活用能力を学習基盤として捉え、児童・生徒が具体的な事例について考え、判断する経験を積み重ねることを重視していく。

また、地域調査やインタビュー等、体験的な学習を取り入れ、実社会との関わりの中で情報を収集・検証する機会を充実させることで、主体的に取り組む態度や、思考力・判断力・表現力の育成につなげていく。併せて、リテラシー検定や読解力向上ワークシート、新聞活用、生成ＡＩの適切な活用などの取組を着実に推進し、児童・生徒の実態把握と指導改善を継続的に行う。さらに、リテラシー教育を個別の教育課題として捉えるのではなく、探究学習や問題解決学習、情報活用能力を支える基盤的な資質・能力として教育課程全体に位置付け、発達段階に応じた体系的・継続的なカリキュラムの充実を図る。児童・生徒がＡＩを含む多様な情報と適切に向き合い、自ら問いを立て、考えを深めながら、高度情報化社会を主体的に生き抜く力を育成していく。

（３）九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育

本校は、六年間一貫教育の強みを生かしながら、文部科学省の生成ＡＩパイロット校及びＤＸハイスクール指定校として、令和６年に独自の生成ＡＩシステム「otomotto」を開発し、全生徒と教員が日常的に活用できる環境を構築してきた。「みんなの学びの“おとも”になるように」という願いを込めた名称やアイコンは生徒自身が制作したものであり、生徒主体の学びを象徴する取組となっている。

有識者からは、本校のＩＣＴ教育について、全国的にも先進的な実践であり、教育活動と校務運営の両面において生成ＡＩを計画的かつ効果的に活用している点が高く評価された。特に、生徒が生成ＡＩを単なる利便性や効率化のためのツールではなく、「自ら考える力を支え、広げるためのパートナー」として活用していることは大きな成果であるとの評価を受けた。また、生徒がＡＩの誤情報や依存のリスクを理解し、ファクトチェックや対話を通じて情報を熟考し、読み解き、自らの言葉で再構成・発信しようとする姿勢は、本校が推進してきたリテラシー教育の成果として高く評価された。

さらに、本校独自の生成ＡＩ環境「otomotto」の整備やプロンプト共有の仕組みは、学校全体の教育力を底上げする仕組みとして機能していることが評価された。教員にとっても、業務の効率化に留まらず、生徒と向き合う時間や授業改善に取り組む時間を創出するなど、働き方改革の一助となっている。この評価の背景には、整備されたネットワーク環境や高性能機器の充実の影響が大きいと考えている。これらは、新学習指導要領で求められる「余白」を創出し、豊かな教育活動の展開へと結びついていくものと考えられる。

一方で、有識者からは、ＡＩ活用が進む時代だからこそ、教科の原理・原則や基礎・基本を確実に身に付ける学び、実体験や観察、対話を通じた概念的理解を重視すべきとの指摘があった。また、プログラミング教育の更なる充実や、探究学習と結び付いた高度な活用の推進など、次の段階への発展に対する期待も寄せられた。

今後は、生成ＡＩやＩＣＴを活用すること自体を目的とするのではなく、生徒一人ひとりが自ら問いを立て、多様な情報を吟味し、異なる経験や価値観を持つ他者と対話し、考えを重ね合わせながら、自らの価値観や判断を形成できる力の育成を目指していく。そのために、個別最適な学びと協働的な学びを一層充実させるとともに、探究学習や各教科の学びを通して、ＡＩには代替できない思考力・判断力・表現力、新たな価値を創造する力を六年間の教育活動の中で育んでいく。

また、本校で蓄積された安全な生成ＡＩ運用の知見や教育実践、プロンプト活用のノウハウについては、区立小・中学校への展開を図るとともに、千代田区全

体の教育ＤＸ及びリテラシー教育の推進に活用していく。そのため、本校では、授業実践や校務での活用を通して、効果的な指導方法や安全な運用体制を継続的に検証し、実践で得られた成果を区内各校と共有し、本区全体の教育の質の向上に寄与するとともに、ＡＩ時代における新たな学びのモデルを創造し、全国の学校教育を牽引する先導的な実践校として、その役割を果たしていく。

（４）定量的指標を用いた項目に係る評価及び意見

ア　全国学力・学習状況調査の正答率

全国学力・学習状況調査の結果において、小学校・中学校ともに全国及び東京都平均を継続して上回る学力水準を維持していることは、各学校における授業改善の取組と継続的な支援の成果であると高い評価をいただいた。特に小学校では、基礎的・基本的な学力が安定して定着しており、児童一人一人に応じた指導の充実が成果として表れているものと判断する。また、全国平均との差だけでなく、学力分布や下位層の状況にも着目し、個々の学習状況を把握しながら支援を行っている点についても評価をいただいた。

今後は、こうした成果を維持・発展させるとともに、中学校段階における学力の変動への対応を一層強化していく。全国学力･学習状況調査や達成度調査、意識調査等の結果を多面的に分析し、基礎学力の定着が十分でない児童・生徒を早期に把握した上で、少人数指導や補充学習、ＩＣＴを活用した個別最適な学びの充実を図り、学力の底上げにつなげていく。また、各学校における「指導改善プラン」の作成において、意識調査の結果を活用し学力に関連付けることで、ＰＤＣＡサイクルによる授業改善を推進し、思考力・判断力・表現力の育成に向けた授業の質の向上を支援する。

さらに、学力向上を正答率などの数値のみで捉えるのではなく、学習意欲や自己肯定感、主体的に学ぶ姿勢など、学びの質に関わる側面も重視していく。児童・生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばすため、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に推進し、これからの社会で必要となる資質・能力の育成を図るとともに、すべての子どもたちに確かな学びを保障する教育環境の充実に努めていく。

イ　千代田区立学校の体力・運動能力調査における体力合計点平均値

評価で示された成果と課題を踏まえ、今後は全国体力・運動能力調査と運動習慣等調査の結果を関連付け、学校全体だけでなく、学級や個人単位でも丁寧に分析し、児童・生徒一人一人の実態に応じた指導の充実を図る。特に、体力や運動習慣に課題が見られる児童・生徒については、運動への意欲や自己の成長を実感できる取組を工夫し、個別最適な支援につなげていく。

また、これまで成果が見られているコオーディネーショントレーニングについては、引き続き全校（園）で推進するとともに、小学校段階で培った運動習慣や体力を中学校段階へ円滑に接続できるよう、発達段階を踏まえた系統的な体力向上施策を検討する。特に課題となっている 20ｍシャトルランや持久走など全身持久力の向上に向け、体育・健康教育推進委員会等で実践研究を進めていく。

さらに、ＩＣＴやＡＩ等の新たな教育手法も効果的に活用し、学習面・体力面双方のデータを継続的に分析・検証することで、エビデンスに基づく教育実践の充実を図る。主体的・対話的で深い学びや探究的な学習との関連を図ることで、自己肯定感の向上を目指し、各教科等の授業改善を推進する。今後も、子どもたちが生涯にわたり健康で安全な生活を送るための資質・能力を育むとともに、基礎体力の向上と教育の質のさらなる向上に取り組んでいく。